妻を在宅でカイゴして（第１回）

今回から、15年にわたり妻を介護している北海道・野瀬義昭さんの体験を連載します。（全６回）

ほっと介護 108

それは一九九六年九月三日であった。名古屋で開催されていた日本高齢者大会に参加していた私は、連れ合いの和子が緊急入院したとの急報を受け、急きょ飛行機でとんで帰り、病院に駆けつけた。

変わり果てた姿に…

「和子　どうした！」と声をかけたが、何のことばも返ってこなかった。うつろな目に涙ぐみながら懸命に口を動かそうとしても、声にならない。ことばも失い、寝たきりになってしまったのである。出発前に「気をつけて行ってきてね」と言われたのが、夫婦としての最後の会話となってしまった。

イラスト・井上ひいろ

変わり果てたその姿に、なすすべもなく、ただ茫然と立ちつくすだけの私が、己を取り戻すのにはかなりの時間がかかった。

和子は五四歳、あまりにも若すぎる。このときほど世の無常さを感じたことはなかった。

「すべて医師にお任せするしかない。少しでもそばにいてやろう」と、ひたすら病院に通い続けた。病名は「脳内出血及び多発性脳梗塞による両上肢及び両下肢の機能全廃、体幹機能障害により座位不能」。

自力で歩くことができない和子は、車椅子の生活になってしまった。リハビリを懸命に続けたが、ことばはどうしても戻らなかった。どんな声かけにも会話ができない和子は、ただ顔を見て笑顔で応じるしかない。哀れでそばにいるのも辛かった。

「家に帰りたい」

入院生活が四カ月を過ぎた頃、話せないながらも「家に帰りたい」と意思表示をするようになった。

家で介護することなど、思ってもいなかった。こんな姿では、到底自宅での生活などありえないだろうと考えていた私は、正直なところ困り果て、頭が混乱した。

まだ介護保険制度もないときであった。そんなことにはおかまいなしに、和子は「帰りたい」と訴えつづけた。

「たとえ寝たきりになっても、自分の家で人間らしく生きたい」との和子の叫びに、「仕事を続けながら在宅で介護ができるだろうか」と、私の人生そのものが厳しく問われ、苦悩した。

在宅介護を決意

そして入院生活一五〇日目、私は和子を在宅で介護することを決断した。和子は全身で喜びを表した。

念願かなって和子は、わが家に戻った。話すことも、歩くことも、トイレにも行けず、食事もできず、寝返りもできず。

ひたすら天井だけを見つめる生活だが、わが家に帰ってきたことが嬉しいらしく、ベッドに横たわる和子の目は「ありがとう」と言うように私を追う。「よかったね」と言って、私は和子の手を両手で握った。

しかし、これが一五年にも及ぶ介護地獄の幕開けの握手となるのであった。

（つづく）